

子どもの運動遊びを支えるということ

西村 拳弥¹⁾

Supporting children's physical play

Kenya NISHIMURA

Key words : Child, Physical play, Psychological change, Qualitative research

キーワード：子ども，運動遊び，心理的変容，質的研究

1. はじめに

近年，子どもの体力低下が社会的な問題として取り上げられ始めたことから，子どもの体力向上を目的とした取り組みが行われるようになってきている。例えば，日本スポーツ協会が作成した「アクティブ・チャイルド・プログラム」や，文部科学省が幼児期における運動の在り方について策定した「幼児期運動指針」が全国的な取り組みとして挙げられる。また，地方自治体単位の取り組みとして，滋賀県下の各小学校では児童に対して毎日体を動かす時間を10分以上確保する「健やかタイム」というものが進められている。このような，子どもの体力向上を目指した取り組みがなされるようになった背景には，子どもの時期に体を動かす経験が運動能力及び，心理的側面に良い影響を与えることが明らかにされてきているからだと言える。

特に幼児期での身体の発育の特徴として神経型の発達は著しく，6歳までに成人の約90パーセントに達する（朴，2008）ことから，幼児期に豊富な運動経験の必要性が述べられてきている。また，運動能力が高い子どもは意欲や人間関係に関する行動傾向が有意に高いという報告（杉原ほか，2010）や，今まで出来なかった運動課題が出来るようになることで肯定的な自己を形成し，積極的に行動する

ことができるようになることも報告（森，2014）されている。

そのような報告がされている中で，幼稚園において定期的に運動指導を実施している幼稚園と，特別な運動指導を実施せずに自由遊び時間を確保している幼稚園とでは自由遊び時間を確保している幼稚園の方が，有意に運動能力が高い（杉原ほか，2010）ということが明らかにされている。つまり，子どもたちには運動そのものを指導するのではなく，遊びを通して体を動かす経験を提供することの方が子どもにとって成長を促すことが出来るのではないだろうか。

これまで進められてきた研究によって，上記したように運動遊びが子どもにとってどのような効果があるのかは明らかにされてきている。しかしながら，運動遊びの中での経験を子どもがどのように捉え，子どもの心理的な側面がどのように変容しているのかという点に着目した研究はされてこなかった。今後，子どもが運動遊びに取り組む環境をより良い環境にしていくためには，子どもが運動遊びの中でどのような経験をしているのか，そしてその経験を通してどのように変容しているのかを現場に立つ大人が理解することが必要である。そこで，本報告では，これまで筆者が，子どもが運動遊びに取り組む現場へ足を運び，運動遊びの中で子どもの心理的側

1) スポーツ学部

面がどのように変容しているのかに着目し、取り組んだ研究について報告を行う。

2. 運動遊び場面における 子どもの心理的変容に関する研究

目的

運動遊び場面において「どのように子どものやる気に拍車が掛かるのか」というリサーチクエスション（以下「RQ」と略す）の下、発展継承可能で有益な仮説的知見を導き出す。

方法

週に一度、運動遊びの指導に取り組んでいる小学校において観察を実施した。主な観察対象は、6年生の男子児童1名であった。観察期間は約1年間であり、観察の際は観察記録を取ると共に、子どもが運動遊びに取り組む様子をビデオカメラで撮影し、データを収集した。観察によって得られたデータは質的研究法である、エピソード記述（鯨岡，2005）、複線径路・等至性モデル（安田・サトウ，2012）、グランデッド・セオリー・アプローチ（戈木，2008）を参考に分析を行った。

結果および考察

得られたデータを基に子どものやる気に拍車が掛かったと考えられる15のエピソードを抽出した。

エピソードを上記のRQの下分析を行った結果、運動遊びに取り組む子どもは「運動遊びを始めるものの、やる気にブレーキが掛かるようなことがあると運動遊びから離れてしまう。しかし、自分が注視されているということに気が付くことがきっかけで遊びの場に入っていくようになる。そして、積極的に遊ぶ中で楽しい経験を積み重ねることによって、もっと遊びたいと思うようになる」というプロセスでやる気に拍車が掛かるという仮説的知見を導き出した。

上記の仮説的知見から、①運動遊び場面において子どものやる気は周囲からの影響を常

に受けており緊張状態にあるということ、②他者から注視されていることによってやる気に拍車が掛かるということ、③遊びの中で子どもは常に遊びたいという思いを抱いているということが明らかとなった。

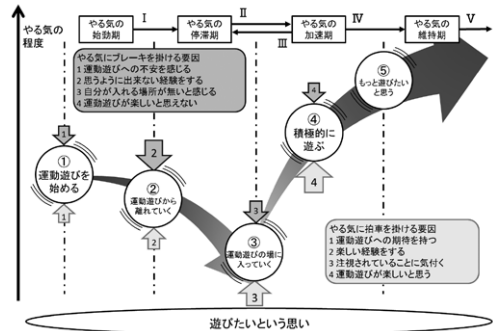


図1. 運動遊びに取り組む子どもの心理体験モデル

3. 運動遊び場面での 子どもの主体性に関する研究

目的

運動遊び場面において「子どもはどのように主体的に取り組むようになるのか」というRQの下、発展継承可能で有益な仮説的知見を導き出す。

方法

観察対象は、週に一度運動遊びの指導を行っている小学校の6年生男子児童1名であった。観察によって得られたデータは質的研究法である質的統合法（山浦，2013）を採用し分析を行った。

質的統合法には「事例の持つ個性・独自性を把握しつつ事例に内在する理論を抽出・発見することを主眼に置き、現場で得られたデータを整合性が取れた状態にまとめることが出来る」という特徴がある。本研究においては、子どもが運動遊びに取り組む現場で得られたデータから、観察対象の個性を守りつつ理論化することができ、見取り図を用いることによって、子どもの姿をより理解できると考えられることから採用した。

結果および考察

観察から得られたデータの分析の結果、子どもが主体的に運動遊びに取り組むようになったと考えられる5つのエピソードを抽出することができた。

各エピソードを上記のRQの下、分析を行った結果、運動遊びに取り組む子どもは「運動遊びに取り組むこと」で、運動遊びに対して見通しや期待を抱いていく。そのような中で運動遊びの場が安心して遊ぶことが出来る場だからこそ、自分から運動遊びの場へ入ろうとし、運動遊びの中で工夫を凝らすようになり、主体的に運動遊びに取り組むようになる」という仮説的知見を導き出した。

上記の仮説的知見から、①運動遊びの場では子どもが「安心して遊ぶことが出来る場」を作っていくことが重要であり、子どもにとってどのような場が「安心して遊ぶことが出来る場」なのかを工夫を重ねる必要がある。②自ら遊びに入ってきた子どもを受け止め、子どもの工夫を受け止めることで子どもは主体的に運動遊びに取り組むようになることが明らかになった。

4. まとめ

本報告では、筆者がこれまで行ってきた研究活動の成果を報告した。冒頭にも述べたように、子どもの体力の低下に伴い、運動遊びの指導の現場が増加し、子どもが運動遊びに取り組む場は増加をしている。このような現状の中、これまでは運動遊びが子どもにとってどのような効果があるのかは積極的に研究を進められてきた。しかし、今後は子どもが運動遊びの中でどのような経験をして、その経験を通してどのように心理的側面が成長していくのかを理解するための視点を持って、研究を進める必要性もある。このようなことが理解出来ることで、運動遊びの現場において、子どもとの関わり方を考えるきっかけになり、運動遊びの場が子どもにとってより良い環境になる一歩になるのではないだろうか。

引用文献

鯨岡峻 (2005) エピソード記述入門—実践と質的研究のために—。東京大学出版社：東京。

森司朗 (2014) 子どもの動きと心の発達。体育の科学, 64 (11) 781-785.

朴淳香 (2008) 身体発達と運動。岩崎洋子ほか編 保育と幼児期の運動遊び。萌文書林：東京, pp.15-22.

戈木クレイビル滋子 (2008) 実践グラウンデッド・セオリー・アプローチ—現象を捉える—。新曜社：東京。

杉原隆・吉田伊津美・森司朗・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩揮・近藤充夫 (2010) 幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との関係。体育の科学, 60 (5) 341-347.

山浦晴男 (2012) 質的統合法入門—考え方と手順—。医学書院：東京。

安田裕子・サトウタツヤ (2012) TEMでわかる 人生の径路—質的研究の新展開—。誠信書房：東京。

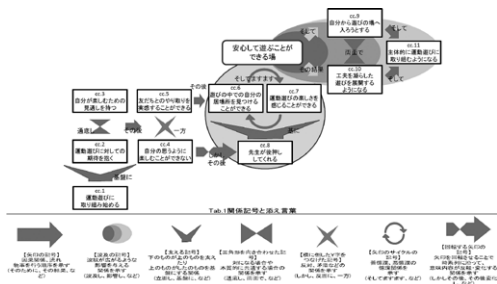


図2. 運動遊びの中で主体性を発揮していくプロセス